
雨の復讐

翠華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の復讐

【Nコード】

N8695U

【作者名】

翠華

【あらすじ】

全ては、復讐のために。

藍染との戦いで、霊力を失った黒崎一護。

彼のもとに、ある日転校生がやってくる。

風神と名乗る少女は、一護に言う。

——力を、取り戻したくはないか、と。

同じころ、尸魂界では、異様に高い霊圧が突発。

そこへ向かった日番谷、白哉が見たものは――

尸魂界にむかって宣戦布告した組織、「肇」

そのリーダー「孔燈」は白哉の昔馴染み!?

一護は力を取り戻せるのか!?

そして、謎の少女、風神の目的とは!?

――今、尸魂界への復讐が始まる。

『白桜は緋色の真実に染まる』です。

戌吊の夜空を、記憶に

序章 夜空

それは、偶然。

その日、南流魂街七十八地区・戌吊で、ほんの一瞬、隊長レベルの霊圧が感知され、念の為、調査に行く、ということだった。

(・・・)

六番隊隊長、朽木白哉は、戌吊の景色に、輿の上から、目を走らせた。

輿が通るたびに、血走った目を向けながら、家の中に入っていくもの。

何かを叫びながら、襲ってくるもの。

それだけで、どれほど治安が悪いのかわかる。

やがて、白哉の霊圧にあてられ、倒れるものが出、道には誰もいなくなつた。

(…やはり、気のせいかな?)

一応、向こう側にも行ってみるか、と思い、進むと。

急に、輿が止まる。

「・・・どうした？」

外から、「女が倒れています」と、従者の声が返ってきた。

「・・・女？」

誰も、手を貸さなかったのか。

このようなところは、みな自分のことに必死なのか。

少し、話を聞いてみようと思い、外に出る。

場で、急速に終わりへと向かう。

或るものは忘れ、
或るものは封じ、
或るものは憎しみを抱き、
或るものは悲しみ、
或るものは怒った、

その、記憶。

時の狭間におかれた記憶は、歪み、誤解を生み、この壮
大な復讐劇へと、
つながってゆく。

——けれど、どうか。

どこかで、琴の音色が聞こえた。

戌吊の夜空を、記憶に（後書き）

・・・むつかしい、、、。

もっと勉強せねば、、、

あ、白哉、一護、日番谷が主人公っぽい感じです。

「こんなのだめっ！！！」て方、参考に意見を下さい！
お願いします！！

色無しの世界（前書き）

藍染との戦いで、力を失った一護は――

色無しの世界

現世・空座町

午前 8 .. 14

――藍染との戦いから、2カ月。

「あ？転校生？」

不機嫌そうに言ったのは、死神代行——で無くなった、黒崎一護。「そろそろなんだよ！でさあ、その子、ちらっとみたんだけどさあ、もんのすごおおおおいナイスバディでっ、っ、っ」

朝からハイテンションなのは、浅野啓吾。

「もう、何者！？　って感じでさあゝ！！」と両手を振りまわしつつ、声高らかに叫ぶ。

「あーはいはい。で？」と適当に返すと、「うおおおおおいっ！！！！返し超適当じゃねえかあああっ！！」と悲痛な叫びをあげ、のけぞった。

——オレは、その様子を見ながら、『平和』を、かみしめていた。

[illegible]

「いよっし・・・じゃ、お待ちかね、転校生の紹介だ」

——藍染を、倒して。

「はいれ」

——仲間を、守って。

コツ、コツ、コツ、

——みんな、無事で。

カツ、、

——うれしい、はず、

「じゃ、名前、黒板にかいて。」

——————なに。

黒板に、字を書く音で、オレは現実に戻された。
少女は、かわいかった。

腰まである、波打つ紅の髪。

「————せい かざみです。」

黒板に大きく、「誓 風神」と書くと、風神はくる、と振り返った。
その瞳は、緋色。

——何故か、その瞳に、うつっているのは、オレだと、思った。

「じゃ、黒崎の右ね。教科書も黒崎に貸してもらえ。」

「黒崎君、これからよろしくね。」

風神は、にっこり微笑んで、そういった。

昼休み。

一護は、いつものメンバーと、屋上で昼食を食べていた。
他愛もないおしゃべりに適当に相槌を打っていると、つい2か月前のことが、思い起こされる。

——ルキアと、出会って。

家族を守るために、死神になった。

——ルキアが、尸魂界に囚われて。

助けるために、チャド、石田、井上、夜一さんと、尸魂界に乗り込んだ。

岩鷲に、霊圧の込め方を学んで。・・・空鶴さんに、殴られて。

一角と戦って、恋次にも勝った。

鬼みてーに強い剣八と、相うった。

——ルキアに、『テメーの意見は、全部却下だ。』って、言っ
てやった。

白哉にかつために、卍解を手に入れた。

——ルキアに、怒鳴られた。『馬鹿者っ!!』『…礼などっ…
言わぬぞ…たわけっ…』

——でも、救った時。白哉に勝った時。

——オレは、無力だ。

町を見下ろすと、無機質な世界があった。

色無しの世界（後書き）

…だいぶ、めんどくさがりました。
時間があったら書きなおします!!
………たぶん。

動き始めた復讐の齒車（前書き）

転校生・風神に呼び出された一護は――

動き始めた復讐の鹵車

「あの、ちょっといい？」

学校が終わり、解散時、そう話しかけてきたのは、転校生・風神だった。

「え？別にいいけど、何の…ってうわっ！！」

答えた瞬間、首根っこをつかまれ、引きずられ、教室を強制退去するはめに…

…後ろでは、有沢たつきがにやにと、織姫に何事かを囁いていた。

――――
――――
――――

「ぐえっ」誰もいない屋上に（首根っこをつかんで）連れてこられた一護は、かたいアスファルトの上にほうりだされ、思い切り尻を打ちつけた。軽く涙目になっている一護に、風神は冷たくいった。
「ほら、さっさと立つ！」

「…じゃあ放り投げるなよ…」と、思わず呟く。

「……なにか？」と睨まれ、「いええっ！？べ、別にっ…」とごまかす。

「…で、用件は？」

問うと、風神は、

「…………死神」と、ポツリ、つぶやいた。

——瞬間、一護の目の色が変わる。

「…おまえっ…何者だ…っ!？」

自然と、声がかたくなる。

風神は、ゆっくりと一度瞬き、答えた。

「あなたに、死神の力を戻させるために来たものです。」

——死神の、力を。

一護は、驚いた、色んな意味で。

——何故、オレが死神だったって知ってる!？

——力を、取り戻すことなんて、できるのか!？

「力を、取り戻したくは、ありませんか？」

——そう、問われた時。

——もちろんだ・って思った。

——怪しいけれど、そんなことより。

——みんなと、また、戦いたい。

——たった半年しか、守ってない。

——そういう思いが、あった。

「——もちろんだ。」

風神は、ほほえんだ。

[illegible]

空座町

午後7..30

石田雨竜は、街中で、大きな屋敷を見つけた。

彼にとっても、通り過ぎるだけのこの場所は、今――

「そうか、例の部屋を使うのか。」

『彼はそう呟く。

『彼』は、復讐者だった。

動き始めた復讐の齒車（後書き）

ひいひいひい！

朝からがんばったあゝゝゝ！

ね、ねむっ

異様な、霊圧（前書き）

一護が、風神に引きずられている頃、尸魂界では――

あ、あと、オリキャラ出ます。

異様な、霊圧

尸魂界・瀨霊廷

午後4…45

十番隊隊舎・執務室。

「——松本おおっ!!!!」

——すでに（悲しいことだが）十番隊名物と化している、十番隊隊長、日番谷冬獅郎の怒鳴り声が響いた。

「たっ…隊長……気温下がってマスよ…」あわあわと言うのは、同隊三席、瀧 翠月。

「ほら、隊長抑えて抑えて。」と、陽気に言うのは怒られている張本人、同隊副隊長、松本乱菊。

「——誰のせいだと思ってやがる!!!! 大体こんな夕がたから飲むな!」

……火に油。さらに日番谷が言葉を継ごうとした時、地獄蝶がヒラ、と開いた窓から入ってきた。

——至急、隊首会を開きます。各隊隊長は、一番隊に集まってください。

各隊、出動準備を行ってください。繰り返します……

「何?! え!? マジで!? 嘘おお!?」軽くパニックになっている翠月。

「——隊長、これは……」乱菊は、険しい顔の日番谷をみた。

「――また、面倒事かよ……」
大概の面倒事を押しつけられる日番谷隊長は、険しい表情を崩さず、そういった。

同時刻・六番隊隊舎。

「理吉イ！！またかよっつっつウ！！！！」

――ここにも、部下をしかる上官がいた。

六番隊副隊長、阿散井恋次だ。

「ふエエエエエ！！！！すいませ～～～～ん！！！！」と悲鳴をあげてのけぞるのは、六番隊隊員、理吉だ。

「ったくよお……………で？地獄蝶、何匹脱走した？」と、いつものように聞く。

「え～～～と……………2, 3びき……………うわっ！！」ゴスっと、恋次の蹴りがはいる。

「理吉！！！！また今度の休暇、捕まえに行くぞ！！」と言い、背をむける。

――理吉は、ほんの少し、安心した。

一護と会わなくなって、2カ月。

最初、すぐく恋次は元気がなかった。

だから、いつも通りの蹴りが。

安心、できるのだ。

……………ていうか、自分にもわかるくらい落ち込んでたからなあ……………

と、地獄蝶が、舞い込んできた。

[illegible]

一番隊隊舎。

いるのは、一、二、四、六、七、八、十、十一、十二、十三番隊の隊長たち。

「――では、説明を、涅隊長。」

総隊長の声が響く。

「総隊長に君たちを呼んでもらったのは、流魂街に突発した異様な
霊圧の調査・採集をしてほしいからだよ。」

「異様な霊圧？」 疑問の声をあげたのは、十三番隊隊長・浮竹十四

郎だ。

が、それはどの隊長も思っていることだった。

――なぜなら。

「しかし、そんな霊圧など、感じないが……」

「そう、」涅槃が続ける。「感じないからこそ、不思議ナンジャアないか。新しく開発した、『霊圧探知機』がなければ、気付かなかったダロウネ。——隊長レベルの、霊圧をネ。」

最後の一言に、ぴく、と幾人かがはんのうする。

——隊長レベルだとわかる、ということは、相手は霊圧を隠していないということ。

・ ・ ・ 考えたくないが、隠して、その程度、ということもある。

「それに、現世にもちらつと怪しい霊圧をとらえてネ…両方の調査を誰か二人に頼みたいのダヨ。」

——決まっているようなものだが。

「ふむ……」すこし、思案する総隊長。

選ぶなら、六、七、八、十。

………決まったようなものだった。

「——では、六番隊隊長・朽木白哉、十番隊隊長・日番谷冬獅郎を特別任務につける！！二名は、まず流魂街へ行き、霊圧の原因を調査せよ！！また、両隊から数名、現世へと人員を派遣せよ！！」

—————
—————
—————

『彼』は、ゆっくりと目をとじた。

先ほどの会話を、思い出す。

『——何故、貴様、名乗り出た。ただの【捨て駒】、となるのは、わかっておったろう？他に【捨て駒】にふさわしいやつも、おったのに。』

『——ええ。——でも。』

――

『……そうか。』

――お前らしい、と、彼女は笑った。

。』

異様な、霊圧（後書き）

え〜と、

ごめんなさい……

「オリキャラ！？んなもんきいてねー、ざけんなっ」
っていう人、ごめんなさい……！！

……いいわけだけど、

『捏造』

とは書いたんですよ、一応……

これからも読んでください！！

おねがいします。

意見とか、要望、感想いただけると嬉しいです。

ゝ恋次、独白ゝ（前書き）

出動準備が発令された時、恋次は一護のことを思い出していた。
番外編第一話。

く恋次、独白く

「くそっつ……なんだってんだよ……」

オレは、蛇尾丸をつかんで、つぶやく。

「やっと、あの一件が落ち着いてきた、って感じなのによお……」

」

——『オレは、自分のやりたいことを自分で決めてやっただけだぜ。』

」

「……一、護……」

――――
――――
――――

――――あいつが、死神の力をもうすぐ失う、と聞いて。

オレや、ルキアが、護廷十三隊のみんなを代表して、お礼と、謝罪にいった。

「―――すまぬ、一護。」

「……なんでだ？」

「我らが、もっと、強ければっ……一護、そなたは、……」

っ……!!」

力を失うことなど、なかっただろう。

大けがをおうことも、誰かを失って、悲しい思いをすることも。

——なかった、はずだ。

「————……すまぬっ……!!」

恋次は、一護に合わせる顔がなかった。

——だって、俺らはさんざん力を借りて、自分たちが楽になるために、許してほしくて、謝っている——許してくれると知っていて、謝っている。

——最低、だ。

一護の口が開く。

「オレは、自分のやりたいことを自分で決めてやっただけだぜ。……お前らが、みんなが、全力でオレを守ってくれたのは、オレが一番よおく知ってる。……だから、」

——お前らが、謝る必要はねえよ。

「——————」

「———長!! 阿散井副隊長!!」
はっと、我に返る。

「阿散井副隊長、朽木隊長からの伝令です！」

——やはり、何かあったのか……

「阿散井副隊長は、十番隊松本副隊長、同隊三席、瀧 翠月とともに、現世へ行き、空座町全域の霊圧調査を行い、異変があれば報告するように。」

——空座町……！？

藍染の影響か……！？

「すぐに出立する！！大至急、穿界門を開け！！あと、理吉に地獄蝶を連れてこさせろ！！三匹だ！松本副隊長と翠月にも『こちらでよう』『阿散井副隊長、それは・・・』あ！？なんだ！？」

「すでに、瀧三席が用意しております……」

「……………」

ゝ恋次、独白ゝ（後書き）

何故ヘンな霊庄一つくらいで出動準備なのかは、今後、書く予定で
す。

謎はますます深まり（前書き）

一護は、風神につれられて――

捏造、でできます。

あと、これから予約掲載になるかも。

謎はますます深まり

「——なあ、どこまでいくんだ？」

一護は、風神の背中に問いかけた。

「もうすぐ折り返し地点だ。」

風神は、足を止め、振り返るとそういった。

——かれこれ一時間は、この山を歩いている。

ここは、空座町のはずれにある山の一角である。

三十分かけてここまで歩き、一時間かけてここまできた。

——登ったり、下りたり、ぐるぐると。

「……おり、かえし。」

なんて、めんどくさいとこにあんの、修行場。

——先ほど——

「じゃあ、ついてこい。いまから、『修行場』に行くぞ。」そういつて、風神はすたすた、屋上の出入り口に向かって歩き始めた。・・
・口調、変わってるよ・・やはり猫かぶり。

「え……『修行場』？？ってナニ？？」一護が疑問の声を上げると、風神は歩みを止め、振り返り、

「……お前は、『最後の月牙天衝』を使ったな。そもそも、『月牙天衝』のわざは、持ち主の霊圧を喰らって、切っ先から超高密度の斬撃を飛ばす、ということ。：原理は、同じようなものだ。だが、『最後の月牙天衝』は、お前自身が月牙になることで、周りの霊圧をとりこむ。自分の力と、周りの霊圧が合わさり、無限にも近いエネルギーが生まれる——まあ、扱える程度に、だが。結局、本人の実力しだいだ。」一護は、解説に頭をフル回転させた。

「これから行う修行は、放出しつくした自分の霊圧を、取り戻すもの。とりあえず、精神統一でもするか……。」

「ええ!? さっさと始めようぜ!？」と、反論すると、また睨まれた。

「——お前、だいぶ揺らいでるぞ。修行したって、死ぬだけだ。……着いたぞ。」

見事に心の動揺を見抜かれた一護は、しばらく呆然とする。……が、不意に背中をドン、と押されて——

ドシンッ

一拍おいて、

「ギ……ぎゃあああああああ~~~~~!!!!!! 行ってエッ~~~~~!!!!!!」

そこは、山のどこかにある岩の真下の、空洞だった。周りは半径1mくらいの円形の場所のようだ。

……暗くて、よくわからなかったが。

ぼ~~~~としていた一護は、風神に問答無用で突き落とされたのである。

尻の痛みに涙しつつ、上を見上げると。

……軽く、2・3メートル以上は落ちている。

見ていると、風神はひらりと軽くおりてきた。

「てっ……てめえ……」

「ん?」

「こっ・・・殺す気か——！！！！」風神に向かって絶叫する。
・・・してから、風神の周りが、ぼんやり明るいと気がつく。

「——！風神、お前……」

「あ、わかったのか？そっかー、残念……」「——おまえ、」

その手に光るのは、赤い、光。

——まぎれもない、赤火砲の。

「——死神、だったのかっ……？」

——なぜ、隠していた？

一護は混乱し、赤火砲が『見えている』ことにきづいたのは、『
修行場』につき、精神統一を始めてから——

—————
—————
—————

「・・・そうか。黒崎一護は、修行を始めたか……」

『彼』は口角をつりあげた。

今からは、黒崎一護次第——

だが、『彼』はそういう、『賭け』が好きだった。

「さて……」

昔馴染みに、会いに行くか。

「なあ、白哉・・・？」

謎はますます深まり（後書き）

遅くなってますね・・・

勢いで始めた感、若干あったし・・・

次は、敵ボス・登場！（たぶん）

どこかで（前書き）

異様な霊圧が感知されたという、流魂街にいった二人は――
ちよつとした番外編も、ちよこちよこ入れていくつもりです。

どこかで

——戸魂界・南流魂街77地区『陽暮』

「——ここらへんにも、反応があるな…」

日番谷は、涅マユリに

『これを持って行きたまえヨ、そしてさっさと霊子を回収したマエ。
アア・・・楽しみダヨ。』

…と言われ、持たされた『小型版霊圧探查機』を使って、白哉と一緒に流魂街を探索していた。

今のところ、強い反応などは見つからず、とりあえず弱くても反応するところをたどっていった。

気になるのは——

(朽木：なんかおかしいよな…)

そもそも、最初オレが「南流魂街に反応が多いな…」と言った時、かすかに、霊圧が揺れた。

そして、治安の悪い地区にちかづいているようだ、と伝えた時の、一瞬固まった顔。

(・・・なにか・・・あったのか・・・)

ピピピッ

『小型版霊圧探查機』が、強い反応を示した。

「——！！戌吊の方からだ！！」

「・・・雨海姫^{うみ}・・・先ほどの・・・」

「あら、見てたの？おばあさまがさびしがってるからって、てつきり『王の間』かと・・・」

「ひっ・・・ひめ！！それはっ・・・」

「くすくす・・・」

「そっ、それより！！先ほどの少年は、何ですか！！しかもっ、死神ですよ！？いくらなんでも、許しがでるとは——」

「なによ、初恋の少年に会って、何か悪い？あなただって、おばあ・・・」

「あわわあっ！！！」

「はいはい。・・・でも、日の光をみるのは、これで最後なんだから・・・いいでしょ？」

「・・・ひ、め」

「いいの。」

———また、あの人の姿を、見れたから。

どこかで（後書き）

昨日は、すいませんっ・・・

今日の小説のこと、これが終わったら続ける（気はやつ）第二部のこと、考えてました：続き、まっけてください！

いきなり（前書き）

現世へとやってきた三人は――

今日は二本目です…

いきなり

現世・空座町

午後7…43

「――石田君!!」

「井上さん……」

通りの向こうから、井上織姫が手を振ってこちらへ走ってくるのが見えた。

「ハア、ハア……く……黒、崎くんの……」

それだけで、なにを言いたいのか察した石田は、

「……うん……そのことなんだけど……」

石田が言葉を続けようとしたとき、

「お……い!! 久しぶりだな、井上、石田!!」

「元気にしてた?」

懐かしい――声が、聞こえた。

「れ……」

「恋次くん! 乱菊さん! あ、翠月ちゃんも!」

頭上から降ってきた三人を見て、織姫は嬉しそうに笑った。

「……? あの子、しってるの? 井上さん……」

石田がきくと、

「うん! 朽木さんを助けた後、しばらくあっちにいたでしょ? よく

迷子になったとき、助けてくれたんだ! 瀧そう 翠月ちゃんだよ!」

織姫が言っている間に地面に着地し、嬉しそうに駆け寄ってきた

翠月が、

「瀧 翠月です……よろしくね!」といった。

「あ、どうも……わっ!」

恋次が、いきなり二人の背中をたたく。

「なあゝゝに水くせえ挨拶なんかしてんだよ！よっ！久しぶりだな、おめーら！」

織姫がまた嬉しそうに、「恋次くん！」という。

「織姫、ちよっと見ない間にこゝんなきれいになっちゃって!!」

「そ・そうですか!？」

「で？」石田はどことなく嬉しそうな四人に向かって、言う。

「また、何かあったのか？副隊長二名も派遣するなんて・・・」

「ああ・・・」恋次が、ため息をつく。

「あのな、今日16時半ごろ、現世・流魂街で異様な霊圧が確認されたんだ。しかも、」

「その霊圧は、感知できないんです!!」と翠月。

セリフを横取りされた恋次が、肩をおとす。

「――・・・ほんっと・・・お前は・・・ガクッ」

「?どしたの？」

織姫がきくと、乱菊が

「ぷはははははは!!!!あれは笑えたわゝゝ!!」と爆笑し始めた。

「?」

事情を知らない二人は首をかしげる。

「とっ・・・とにかく!!」

恋次が叫んだ。

「現世の方のヘンな霊圧を、俺たち三名が調査することになったんだ。この・・・」

と、翠月がさっと『小型版霊圧探查機』を取り出し、

「『小型版霊圧探查機』で、地道に!!」

とまたもセリフを奪った。

「・・・おまえ・・・わざとか・・・?わざとやってるのか・・・?」

と肩をぴくぴくさせる恋次に、「?」と首をかしげる翠月。

「ち・・いきなりかよっ!」

まっすぐこちらに跳んでくる死神をみつつ、舌打ちをする。

「なあ、又シさまはもう接触してるかな!？」

「もうしているかもな。」

「えええ、きっちりいこうつつったのに!」

「だから、『かも』だって!!」

「ま、とにかく。」

「はあああああ!!」

「死神は、」

まっすぐに刀をふりおろす。

「みなごろしだ!!!!」

キイイイイイイン

空座町の夜空に、刃の音が、木霊した。

いきなり（後書き）

つぎは、どっちの話にしよう・・・

ナゾ、なぞ、謎、そして下準備は整った（前書き）

修行（精神統一）中の一護が考えていることは――

悩んだ末、こちらにしました。

やっぱり同時に・・・と思って。

ナゾ、なぞ、謎、そして下準備は整った

現世・空座町

午後7..30

「.....」

..謎だらけだ。

先ほどの穴は、奥に続いていた。

そこをまた一時間くらいかけ、道が途絶えたところの真上に、『
畳』があった。

そこをおし、上へあがると、六畳くらいの部屋だった。

取り合えずそこで座禅を組んでみた（精神統一っぽいイメージ）。

風神は、『修行部屋』の準備にいく、といって出て行った。

精神統一⇨思考整理時間に、『問題』を整理しておこうと思った
一護は、改めて考え直していた。

(.....)

そもそも、風神はどうしてオレに協力してくれるんだ？

こいつは一体何者だ？

何が目的だ？

どうして、赤火砲が『見えている』んだ.....???

本当に、死神の力を、取り戻せるのか.....?

ここ、どこだ???

「.....腹..減った.....」

[illegible][illegible]

「・・・よお、白哉、こんにちわ、少年。」

[illegible][illegible][illegible]

『始まり』を感じ取る――

「さあ、我らの出番だ。――行こう。」

我らの命を懸けて。

ナゾ、なぞ、謎、そして下準備は整った（後書き）

超短編っ・・・！！

・・・すいませんっ・・・

でもっ、次からバトル、入ります！！

翠月の斬魄刀も描きます！！

――復讐、始動!! (前書き)

尸魂界・空座町、それぞれが、戦いの始まりを感じ取っていた。

やっと始まるよ…
けっこう長いよ…

「――！！」日番谷は、成帛にはいり減速した刹那、風を切ってきらめいた刃に、とっさに氷輪丸を抜いて受け止める。

「くっ・・・！」

（――！！霊圧を、まったく感じなかった――！！）

白哉が、その人影に切りつけると、相手は跳んでかわした。

「――貴様、何者だ。」

白哉が、千本桜の切っ先をおろし、射抜くような視線を向け、問う。

「・・・なんだよ、白。――もう、忘れたのか？」

白哉は、その声に、目を見開く。

日番谷は、「・・・知り合いか？」とぼそつと呟く。

ややあつて、白哉が、呟いた。

「・・・・・・こう。」

「なーんだ、覚えてんじゃん。あ、でも、もう違うから。オレはな、もう『環 昂』じゃねえから。」

「・・・まさか、お前が・・・」と呟く白哉。

「ア――うん、そのまさか。」

「・・・なんなんだ？」日番谷は目を細めた。

「えっと、尸魂界に復讐するために戻ってきたぜ。――朽木、白哉。」

「――復讐――！？」

すると、うって変わった様に『こう』が言った。

「――我が名は、孔燈^{こうとう}。尸魂界に復讐^{ちやう}するためにつくった組織、『肇^{ちやう}』のヌシ。」

『こう』――孔燈が、低い声でそう告げ、天に向かって低く詠唱した。

「――黒白の羅」孔燈の両腕に――紋が、現れる。

「――！！天廷空羅か！！」

「――二十二の橋梁 六十六の冠帯 足跡・遠雷・尖峰・回地・夜伏・雲海・蒼い隊列 太円に満ちて天を挺れ――」
空中に、紋が出現し、鬼道が、完成する。

「――縛道の七十七、天廷空羅」

瀨靈廷、流魂街、そして空座町。

全ての死神へ――

「――聞こえるか？死神共。」

「今回、お前らに戦闘準備をさせたのは私だ。」

「――なんだと！？」日番谷が、驚いて言う。

「尸魂界じゅうの地獄蝶は全て我らの支配下にある。すこし、面白みがあるだろう？――全戦力をもってしても、敵わないことを、思い知るといい。今から、同時に虚^{ホロウ}が色んな場所で大量出現する。すべて、強いぞ。――我らは、隊長格のみとの戦闘を望む。全て終わったときに、復讐を遂げてやる――」

「――隊長格、のみ・・・!?」白哉も、驚いたような声音だ。

「――蓮明^{れんめい}、漣光^{れんこう}、栢火^{はくび}、檳榔^{しんろう}。いいぞ、門を開けろ。」

その途端。

あちこちで、とんでもない数の虚が現れる。

そして、大虚の霊圧も――

「なっ・・・ななななんなんですかたいちよおおぅ!!!」

「黙れ、大前田。」

冷たくあしらうも、思わずちっと舌打ちしたくなるほどの数。

「刑軍に通達――!!!」

「な、なんだ!?!」

「ひっ・・・檜佐木さんっ・・・これは・・・」

「――隊長!」

「ええ、勇音。みな、用意はいいですね?」

「う、うわあ!!! 恋次さんたち大丈夫かなあ・・・???」

「隊長、大虚が・・・!!」

「うむ、すぐにみなに伝えろ!!」

「隊長・・・っ!」

「――二人は・・・」

「ああん?面白そうなことになってんじゃねえか。」

「行くの、剣ちゃん?」

「ああ・・・退屈してたところだ!!」

「ホウ・・・私たちも行くヨ、ネム!!」

「はい、マユリさま。」

「・・・っ!」

「浮竹隊長!!これ・・・」

「たあ――いちょうー!!御無事ですか!!?」

「近くに反応ありましたよ!!!!」

「ククク：ここらにも、現れるぞ。私がいるからな・・・」

鬼道をやめ、二人に目を向け、くっ、と嗤う孔燈。

「地獄蝶を乗っ取った・・・?」

呟いた日番谷にちらり、と目をむけ、答える。

「・・・ああ。だから、好きなようにできる。いずれちよつとしたことをしてもらう。・・・さて、あなたたちには、一足先に…」言いつつ、手中の刀を上げる。

[illegible]

午後8..
01

⌈
•
•
•
!
!
⌋

「・・・！
てめ・・・！」

「∴破道の三十二、黄火閃」

「縛道の九、撃」

「……！ やっぱり、お前は……！！」

「なんだ、ちよれーもんだな。」

二人が呷くそばで、翠月は男をじっとみていた。

⋮

「あわわっ・・」

とつさに三人は瞬歩で避ける。
その拍子に、誰かが相手の縛道を解く。

「——だれだ!？」

突然現れたそのものは、

「・・・私は、湊斗そうとと言います。そして、」

縛道を解かれた男が叫ぶ。

「オレは氣き船せん!!おい、そのの!!」

そのの、と言われた翠月が

「そのの、じゃなくて翠月。」と訂正する。

「じゃ、翠月!!おまえ、斬ばk・・・へぶっっ!!!!」

突然現れた女が、氣船の尻を思い切り蹴る。

「おいっ!あたいを忘れんな、ぼけ!!!!」

新しく登場した女に、恋次は

「・・・氣付かなかった。」

と冷や汗をながした。

「あ、あたいは爛らん槓!!!!よろしく!!」

氣船を蹴っ飛ばしながら、軽く挨拶する爛槓。

「・・・」

三人は沈黙した。

「いてて・・・とにかくっ!!」

氣船が再び言う。

「翠月、俺と斬魄刀を解放して勝負しようぜ!!一対一!」

「・・・そうですね、では私はその麗しいおじょうさんと・・・」

「え——!!あたいたのムサオと!?!」

「誰がムサオだコラあ!!!!」

思わず突っ込む恋次。

「・・・わかった。そうしましょう、松本副隊長。」

翠月がいった。

「いける? ・ ・ っ て聞くまでもないか。」

「・ ・ はい。」

「・ ・ おい、おめえら否定はしねえのな。」

そして、三人はそれぞれの相手と対峙した。

――復讐、始動!! (後書き)

遂に戦いの始まりです!!

あと、また翠月の過去を描こうと思ってます・・・
やばっ、翠月大活躍になってしまう・・・この話。

尸魂界編・二番隊―1（前書き）

二番隊の戦い・1

尸魂界編・二番隊Ⅰ

尸魂界・二番隊隊舎前

午後8…03

「――以上！すぐに行け！！」

「はっ」

ソイフオン
碎蜂率いる二番隊および隠密機動は、今情報収集・敵情報把握のために出ていた。

「た、隊長おー！！ゴマせんべえが消えたんすよー！！知りませんかつ：おぶっ！！！！ぎゃああああー！！」

大前田にクナイが刺さった。

「黙れ！行くぞ！！やつら、瀨靈廷に来ようとしている！」

「ええ！？る、流魂街は…！！？」

「――だから早く行くのだ、馬鹿者が！！」

瞬歩で一氣に北の門、黒稜門こくりようもんまで行く。

門番・斷蔵丸はすでに地に伏しているという状況だった。

「――！？あれは……」

碎蜂が呟く。

門は、『斬られて』開いていた。

「虚の仕業ではない……！」

とりあえず、開いた門に群がる虚を何とかしようと思いつつも、誰かが近くにいる可能性を考慮して、大前田を放り込む。

「うわああああアアあゝ……」

「……さて、」

大前田の悲鳴を聞き流し、腰の斬魄刀に手をかけた。
スッと引き抜くと同時に、後ろに振り上げた。

キィイン

音がして、二人はとび退った。

「うわあ、やっぱり強いね！フォン先輩は！」

「……私の相手は、お前か」

碎蜂は、相手の女を見た。

「……確かに、霊圧を感じないな。」

「そりゃどーも。あーあー、私いきなり隊長と戦うのおく？かすみ香澄イ
！」

彼女が声を上げると、彼女の横にまた女が現れた。

「はあ！？あんた白打は一級だったでしょうが！真桐まきり！」

「でも総合ではあんたのほーが上だったよ！」

「私は遅いの！」

言い合いを始めた二人は、ひょいっと体を反らした。

碎蜂が斬りかかったからだ。

「黙れ、これは貴様らの仕業か！」

二撃目を放ちつつ、言う。

「うーくん、これをやったのは栢火で命令したのは又しさまだから、
違うな！関係者ではあるけど。」

「あたしたちはこの混乱に乗じて、戦りたい相手と戦えて！」

二人は避けながら言った。

「では、貴様らを野放しにはできません！…かつての愛弟子だとしても、
な。」

二人は、昔なら浮かべなかったような、冷たい笑みを浮かべた。

「……、先輩！よろしくお願いします！」

そう言って、真桐十席は頭を下げた。

「またか、まあいい。手加減はしないぞ？」

副隊長の碎蜂は立ち上がった。

「あ、ずるいよ、まき！あたしも！！」

香澄九席がかけてくる。

「まあ、この間よりはましな戦いをみせろよ？」

「こっ……この間は、藍染副隊長がきてて……」

「まき、みとれっちゃったんだよねェ」

「か……香澄イ！！」

ぶんっ、とこぶしを振り回す真桐。

「わっ……っとと」

「おい、気を散らすなよ？」

「お、どうした？また稽古か？」

夜一隊長がくる。

「よ……夜一さま！何故ここに！」

「いや、いつもじゃからの……どれ、わしも付き合おうか。」

「ほ、ほんとですかっ！！やったあ！」

「やった！じゃあ、はやくいきましょ！！」

「ええ、よく覚えてますとも。私たち、夜一様がいなくなっ
てからえらいあつかわれようだったよねェ？」

「うん、うん。ほ……んと、ひどかったわ」

「それで、死んだ時も気にしてなかったしね、私たちのこと。」

「」

「――……」

続けて、真桐がいった。

「ひどいよね、今までは稽古にも付き合ってくれて、ピンチのとき
は『犠牲を出さずに』連携プレーで倒してたのにさ。」

香澄も言う。

「夜一様がいなくなって、自分のことしか考えなくなったんだよね」

エ、それでピンチも『相うちで死ね』だよ？」

「まあ、死んであの方に拾われたから、よかったけど。」
ぼそつと真桐が言う。

「あー、それはねえ…」

二人は、頷きあうと、突然消えた。

「――！！どこにっ…」

「ここ、ここ。」

後ろから声が聞こえたとき――

ザしゅっ

血しぶきがまった。

尸魂界編・二番隊Ⅰ 1（後書き）

次は三番隊？

『再見』（前書き）

残酷な描写入ります。

『再見』

尸魂界・三番隊

午後8..06

「じゃあ、四班は九番隊二班と共に南流魂街へ行き、虚を片付けろ
!!!」

「一班は九番隊一班と共に朱?門へ向かうぞ!」
三番隊は隊長不在のため、吉良は同じく隊長不在の九番隊・五番隊と共に流魂街へ虚退治、そして朱?門の守護へ向かった。

「——うわ、こりゃひでえ……」

朱?門を目前に、三番隊の誰かが呟いた。
皆も、言葉がなく沈黙している。

それは、門が原型を留めないほど無残に破壊され、辺り一面が真っ赤に染まっている光景だった。

その血は、・・・おそらく、流魂街の住民のものだろう。

なぜなら。

真っ赤な池の中で、二つ生命があったからだ。

片方は、小さい少年。

もう片方は、流魂街の住民のようだった。

少年が、真っ赤に染まって、笑いながら、血の池を創っている光景。

「——!」

その少年の瞳が、こちらを捉えた。
ぽい、とつかんでいた死体を放り出し、こちらに向いた。

一瞬、だった。

とっさに刀を構えたものは、助かった。
が、それ以外は。

物言わぬ死体となって、落ちていった。

「…ば、バケモノ…っ」

「…お前たちは、逃げろ。」

刀を構えたまま、吉良は言った。

「え…」

「早くしろ！！死にたいのか！！！」
叫ぶ。

目の間えの少年の實力は、おそらく隊長と副隊長の中間くらい。
つう、と汗が流れた。

「…！！はいっ！！みんな！！！！」

少年は、おわなかった。

代わりに、じっとこちらを見ていた。

と、いきなり斬りかかってきた。

「くっ…！！！！」

受け流し、回避する。

「…い。」

少年が、なにか言った。

「…い、…がい。」

聞き取ろうと、した時、刀が弾き飛ばされた。
斬られる刹那、聞こえた。

「…おねがい、コロシテ」

そして、なにもきこえなくなった。

斬られて落ちてゆく吉良をもう見ずに、少年は後ろにむいた。
そこには、予想したとおりの、二人がいた。

「…ねえ、覚えてる？ ぼくとの、『誓』。」
言葉を、紡ぐ。

「…：代わりに、『夜闇^{やあん}』となること…」
その人は、ほほ笑んだ。

「うん。じゃあさ、破ったら？」

「…もとの形に、あるべき輪廻^{りんね}に戻る…」
「うん、だからさ。」

その人が、ゆっくりと刃をさやから抜く。

「…じゃね、『再晃^{さいこう}』。…君のこと、残念に思うよ。…せめて、僕
の手で。逝かせて、あげるから。」

だから、とその人は言った。

「…：今度は、…：幸せに、なって、ね。」

ぼくの『仕事』がなくなるように。

…落ちていった『再晃』を見ながら、もう一人は思う。
この人は——兄は、自分の『仕事』を心底嫌っている。
『夜闇』も、自分の目的のためにしか、使っていない。

今、この一家がもし、ここにいたなら。
復讐など、しなかっただろう。

そう、歪まなかった——

「…もう時間切れだ。四番隊が来ている。…再見は、助かるだろうな。念のため、メモリーを消しといてよかった。」

兄は、そう言って、後ろに『門』を出した。

「行くよ、風神。」

「…はい、にいさん。」

本当は、わからない（前書き）

一護は、ついに何も解決しないまま、修行へ！！
そのうちに一護は、風神を

・・・いいの？これで？

でもまあ、しゃーないかも・・・

本当は、わからない

本当は、何を思ってるの？

本当は、何を求めているの？

本当を、隠してるの？

——どこへ、行きたいの。

現世・空座町

午後8…11

「う・・・うんめEEEEEEEE!!!!!!」

「腹へった」と呟いた一護は、だされた料理の旨さに感激する。

「うるさい、黙って食え。」

冷徹な天罰Ⅱ食事を一品風神に減らされた一護は、「ああっ肉！

！」と悲鳴を上げる。

「大体、のんきに飯なんて食ってるヒマあるのか？ 貴様。」

野菜の漬物をつつきつつ、「うー肉ー」とぼやいている一護に言う。

「ん？ なんでだ？」

そう尋ねる一護には、やはり大切なものが欠けているのだろう。

「——いや・・・」

風神は、目を伏せた。

きつと、いままでのこいつなら、「なにかあったのか、」と聞くだろう。

「――なんでもない・・・」

一護には聞こえないように、呟く。

ときどき、本当にわからなくなる。

『あの人』は、『風神』がいなくてもいいと思ってるだろう。

たとえ、私に、『ボクを手伝ってほしいんだ。――ね、たった一人の肉親。』と、囁かれても。

『必要、なんだ、君は。』そう、言われても。

知っていた。

『あの人』は私など、視界には入れていない――

「――み？風神、修行は？」

ふつと気配を感じて顔を上げると、一護が覗き込んできた。

「ああ、いけるか？」

「おう。ばっちりだ!!」

一護は、迷いを断ち切った顔をしていた。

「――じゃあ、行くぞ。」

「・・・でけえ・・・」

始めの一護の反応がそれだった。

「ああ・・・ここは・・・っと・・・」

危うく、『ここはどこか』をばらしかける。

(・・・しかし・・・不思議と、信頼できるやつだ...)

ここは、初めの六畳の部屋からでて、えんえんと続く窓ひとつない廊下を歩き続けてきた。

そこは、一面モノクロの部屋。

「…いいか、ここは霊圧操作が死ぬほどできないお前専用に使われた『修行部屋』だ。」

「……『死ぬほど』は余計だ……」

呟く一護を無視し、説明を続ける。

「とにかく、お前はここで、『斬月』を探せ。あるはずだ。」

「へ??? いや、隠せるところなんか……」

「……あのな、霊子でできてるもんが見えるわけあるか。」

「は? でも、オレ『赤火砲』見えてたぞ。」

「……お前、思ったより……」

「ん?」

? を頭の上に出してアピールする一護を一瞥し、

「……さっさとやれ」と言い捨て、踵を返した。

「んだよ、あいつ……」

一護は呟き、思案し始めた。

「チッ……」

思ったより早く、一護が力を取り戻しそうだ。

「……『ヌシさま』に、いわないと、ね……あと、」

兄にも。

本当は、わからない（後書き）

すいません…
一日遅れて。

まさか…（前書き）

現世では、三つの戦いが繰り広げられていた。

あの前の詩っぽいの、なんとなくつけているだけです。

まさか…

現世・空座町上空

午後8…05

「よろしく、ムサオ!!」

「ムサオじゃねえ、六番隊副隊長阿散井恋次だ!!」

先ほどのところから、少し西にいったところに、恋次と爛^{らんでん}槓はい
た。

「たつくよ…なんなんだよ、尸魂界に宣戦布告ってか!?!」
剣を抜いて切りかかりつつ、叫ぶ。

「あら、わかってんじゃない、む・・」

「ムサオじゃねえばけ!!!」

キィイン、と金属音が木霊した。

「わ、あなたホントに副隊長? つつよーい! さっきの三席の子も
つよそーだったし…はああ、やっぱ進歩してるわあ」

「はあ?…あ?…? なんか、聞いたような声…って、まさか!!!」

もう一度、距離をとり、まじまじと相手を見つめる。

・・・すると。

「なっ…!!!」

翠月、氣艚はその場に残り、睨みあった。

「…手加減しないですよ?」

翠月が斬魄刀を抜く。

「つたりめーだ、この野郎…」

同様に、氣艫も剣をかまえた。

「……では、いきます。」

翠月が、斬魄刀を持った右手を左の肩へ持っていく。左肩と右手に斬魄刀が挟まれるようになる。

「――海に帰し、空に翔けろ」

ゆっくり、右手を元の位置に戻す。

「――風神」

ゴオオオッ、と風がつばから刀身に向かって巻き起こる。

その風が止んだ時、柄は三角形に、刀身は翠色に輝いていた。

「――じゃあ、俺も。」

氣艫は眩き、自らの刀を白哉のように立て、柄をしたから叩いた。柄が、数センチ押され、そのぶん刃が数センチ伸びる。

「――嗚らせ」

刃が、伸びた分、消え、霧散した。

「雲霧」

よく見れば、つばも消えている。

木刀のようになった、『雲霧』。

――が、彼女には感覚で、『雲霧』の欠片が中に浮いて、こちらを睨んでいるとわかった。

「――一行くぞ。」

乱菊は、湊斗という男と相対していた。

「十番隊副隊長、松本乱菊よ。よろしくね。」

軽く挨拶を交わし、自身の斬魄刀、灰猫を抜く。

「あ、気が早いですねえ、どうも……」

湊斗はため息をつき、刀を抜く。

「――ねえ、さっきの声のやつ、今どこにいのよ？」

乱菊がきいた。

「ああ：ヌシさまは、たぶん『戌吊』ですね。」
それを聞いた途端、乱菊は解放した。

「——唸れ、灰猫」

湊斗は、スツと飛び退くと、右手を左手に添え、大きく振り上げた。

「——迷え」

剣先から、ぶわっと霧がわきでる。

「——霧夢きりゆめ」

霧が、乱菊を包む。

霧の向こうから、湊斗の声が聞こえてきた。

……今入った報告によると、ヌシさまが隊長格二名を我々の本拠地に引きずり込んだようですね…

「——！！隊長と、朽木隊長——！！」

「……ごくろう、蓮明、漣光、栢火、楨瑯。」

戻ってきた四人を労ってから、苦い表情を浮かべる。

「…どうされましたか」

蓮明が尋ねる。

「……いや、隊長をなめていたな、と思って。」

引きずり込んで、『通路』を通っているとき。

卍解をして通路を歪ませ、逃げ出した。

「……まあ、こちらの世界にいることは間違いないからな…強制射

出されて気を失ってるだろうから、早めに見つけ出すよう、指示しておいたが：あ、お前たちも加わってくれ。」
「はっ」

誰もいない部屋に、琴の音が響く。

まさか…（後書き）

一応、『風神』^{ふうじん}は風系最強という設定です。

彼岸花（前書き）

昂は、孔燈とは、何者なのか――！？

彼岸花、私が好きな花で、登場させたいな―と！
花言葉は『再会』や『想うはあなた一人』です。

彼岸花

「う——ん…」

一護は、風神が出て行った後、一人考えていた。
が、やはり考えるだけ無駄、という結論に達した。

・・・家は、

「……夏梨^{かりん}と柚子^{ゆず}がオヤジに言ってくれてるだろうから、いけると
思うン……だ……けど……」

・・・やがて、一護は眠っていった。

尸魂界・南流魂街七十八地区『戌吊』
午後8…05

「——開け」

孔燈は、振り上げた刃を前に突き出した。

「——鬼門^{きもん}」

孔燈が唱えた途端、彼の後ろに、『門』が現れた。

「鬼門の神、『神茶・鬱壘』」

孔燈が言う。

すると、門から葦をよった縄が現れる。不気味に蠢く縄は、一直
線に二人に向かってとんできた。

「——霜天に座せ『氷輪丸』!!!」

「——散れ『千本桜』」

二人も斬魄刀を解放し、応戦する。
が、縄は凍らせても、切り刻んでも現れる。

白哉は、埒があかない、と判断し、『千本桜』の切っ先を孔燈に向けた。

ひゅっ、と音をたて、孔燈の服の前が切り裂かれる。

「ツとと……あつぶねーなー、白。」

その口調が、『こう』に変わった。

かすかに、白哉は眉を顰めた。

と。

はらり、と、何かが落ちる、気配がした。

「――……？ 彼岸、花？」

日番谷は、その花弁を少し見やった。

そして、白哉が、動かないのに気付く。

「――おい、朽木っ！！」

一瞬氣をとられ、縄に引っ張られる。

「ッ……！！しまっ……」

ゴォオオッ、と門が三人を飲み込んだ。

――どうなっている？

白哉は、そいつを、『孔燈』であり――

「――染め上げろ、『ひそめ緋染』」

――――――こう――『昂』を見つめた。

確かに、禍々しい紅の刀身は、あいつのもの。

でも、なぜ、なぜだ？

「——白。お前を、オレは、許さない。緋真を——あいつを殺した、お前を……！」

視界を、彼岸花の赤が染めてゆく。

——白哉さま。私、この花が好きなんです。

小さい頃から、きっと現世でいたときも、目にしていたんだろう、この花を。

そう言っていた。

彼岸花（後書き）

ああ、やばいっ…

構想迷ってきました〜！！

どうしょ…

雨月（前書き）

眠りに落ちた一護は、夢を見る――――

雨月

私は動けず、話せないけれど、

あなたの心に語りかける。

「――黒崎さん？」

その語りかける声に、ゆるく目をあける。

「……………あんた、誰だ？…なんで、ここに来れんだ？」

周りは、いつも目になっていた、ビルが横に立ち並ぶ世界。

一護の、精神世界。

一護が寝ころんでいたところから、1・2m離れたところに、白に桜の着物をまとった女がいた。

長い漆黒の髪が、ふっとなびく。

女は、じっと、桜色の瞳で一護を見つめていた。

「…私は、『雨月』^{うげつ}」

女は、唇を動かさずに、そういった。

「……ここに来たのは、『或る人』に頼まれたのかもしれませんが…
私自身、あなたに興味があったもので。」

「……或る、人。」

「……はい。」

女は、ふわりと悲しそうにほほ笑んだ。

「…なんで、オレを知ってる？なんで、オレに興味があるんだ？」

「……『あの子』がいつも、教えてくれますから。」

「あの子？」

今度は、嬉しそうに笑った。

「ええ。…優しい子です。大人のわがままにも、付き合ってくれるんです。」

でも、と呟いて、雨月は目を伏せて言った。

「ずうつと前に、笑わなくなったんです。……それまでは、笑ってました。或る時、或る死神を見てからは、毎日毎日、琴を、それは嬉しそうに弾いてたのに。」

語る雨月は、本当に悲しそうだった。

「あなたに興味があったのは、あの子を変えてくれるのではないかと、思ったからです。今まで、死神たちを変えてきた、あなたなら、と。」

「……なん、で。」

知ってるんだ？

その心の声が聞こえたように、雨月は答えた。

「私は、『知ること』ができますから。」

それより、と雨月がいった。

「あなたは、死神の力を取り戻したいのでしょうか？」

「……ああ。」

「…本当に？それで、皆を傷つけることになって？」

「…おれが、護るから。」

おれは、母さんを護れなかった。

藍染から、みんなを守ったけど。

「…また、なんか起こってんだろ？」

気付いてた、でも。

「……守れる力がなくちゃ、なにも。」

そう――

「なにも、できない!!!!」

知っていても、わかっていても。

力がなくちゃ。

何もできないんだ。

「――はい。」

急速に、視界が霧に包まれゆく。

「――あなたの願いを、かなえましょう。」

それを最後に、一護はなにもわからなくなった。

雨月（後書き）

やっと一護復活！？

でもあやしい展開になりそうです・・・

『榎天』(前書き)

現世では――――

『榎天』

なにも覚えていないのに

あなたを知ってる気がしたの

現世・空座町上空

午後8..10

「お前はッ……!!」

恋次は、見ている爛槇の顔が、さらさらと崩れてゆくのがみえた。
「ハアイ、久しぶり、恋ちゃん。ルキアちゃんとはうまくいったん
の?」

崩れた顔の下にのぞくのは、かつての上官の顔。

「――榎^{かてん}天副隊長……っ!!」

――榎天副隊長は、恋次が六番隊副隊長になる前の『六番隊副
隊長』だ。

優秀で、はじめをきちんとつけるところが、気に入られて
いたらしい。

「どうして、あんたが……」

——しかし、ある任務で死んだ。

大きな事件だったらしい。

メノスクランデ
大虚が1体、謎の虚が3体。

その任務に小隊と共に行ったまま、帰ってこなかったと。
が、もう虚は消えていた。

よくわからないまま、終わった事件——

「——生きてるか、って？」

クス、と嗤う爛槓。

「ええ、わたし、一度死んだわ。でも、何故か輪廻の輪に戻れなかった——」

思い出すように、爛槓は目を閉じた。

「どうした、娘？なぜ、泣いておる？」

「——でもね、」

かっと目を開いて、爛槓は叫んだ。

「『あの方』が、私を救いだしてくれたのよ。そして、私は『なんで死んだか』を知った。だから——」

恋次は、急激に上がった爛槓の霊圧に、一瞬ひるむ。

「——私は、みんなみんな、瀟霊廷の腐ったやつらを、殺してやる
って思ったの——」

爛槓が、刀を逆手に握った。

「——操れ」

刀が、くる、と恋次に向けられる。

「——『殻繰からくり』——」

ぶわっと、刀身から光が放たれる。

(やべえッ……!!)

光をまともに浴びた恋次は、光が消えてしばらくのち、自分に変化が起こっていることを悟った。

体が、動かない。

「…」

(チッ…しくった…)

「……覚えてるよね？あたしの、斬魄刀の能力。」

答えるように、恋次の体が刃を納める。

「うん、いい子ね……じゃあ、乱菊ンとこいこっか？」

「何……？」

霧に包まれた乱菊は、あたりを見回した。

とくに、変わったところは見られない。

——これから、お見せしますよ。

湊斗の声が、霧の中から聞こえた。

——デ……

は行きます、と続けようとしたのだろうが……

それは、突然乱菊に斬りかかってきた人影によって、遮られた。

「——恋次!？」

それが恋次だ、と気付く。

「あんた——」

どういうつもり、と聞こうとしたが、続けざまに放たれた攻撃に断たれた。

「――『海風』!!」

『風神』を体の前で胸に水平に構え、叫ぶ。

「――!! うわっ……」

氣艙が、こちらにぐん、と引っ張られる。

「くっ……『雲霧』!!」

氣艙が、引っ張られつつ、叫ぶ。

ひゅん、とこちらに風に乗って『雲霧』の欠片がとんでくる。

「――!! 『薙風』!!」

欠片を風でたたき落とす。

その間に、氣艙がこちらに斬りかかってきた。

キィィィン、と交錯する刃。

「――六杖光牢」

現れた六つの光が氣艙をとらえた。

「へっ……『雲霧』!!」

『雲霧』の欠片がまた迫る。

「――……」

一瞬迷うそぶりを見せ、それを断ち切るように翠月は唱えた。

「――『風籠』」

迫っていた欠片が、風にとらえられる。

「『廃炎』!」

風ごと『雲霧』が消滅する。

「――! くっ……」

わずかに氣艙が顔を歪めた。

が、その間に縛道を破る。

「……やるな、お前。」

「……そちらこそ。」

二人とも、息をついた。

そしてまた、刀を構えた。

―――ねえ、雨海。

『声』に耳を澄ます。

―――会えるかもよ。

「……ふふ……そんなわけ、ないわ。」

そしてまた、琴を鳴らした。

月神（つくも）（前書き）

『通路』に引きずり込まれた二人は――

月神（つくも）

たった一人、また、月を仰ぐ。

手の届かぬ月を。

・・・そう、思っていた、けれど。

「くっ……」

日番谷は、ぶつけた衝撃のせいかわずかに痛みの残る体を起こした。

「……ここは……」

そこは、どこかの屋敷の一室のようだった。
和風の部屋。

自分が寝ころんでいたのは、薄い普通の布団。
氷輪丸も、すぐその壁に立てかけてある。

「——たしか……」

さっき（？）孔燈の攻撃を受けて、門の中で、正解をしたら、
空間が歪んで——

「……で、ここはどこだ？」

たちあがり、障子を開けた。

——目の前に広がった景色に、一瞬目を奪われる。

舞う花々が彩る、庭。

桜。秋桜。彼岸花。水仙。

季節の違う花が、同時に咲いている——

目を奪われていて、彼岸花のそばにしゃがみこむ二人に気付いたのは、数秒後。

女と、少女。

そのうちの一人を見て、息を飲む。

「……あんだ、」

「いたぞ！蓮明！」

「ああ！」

四人の会話を耳にとらえつつ、千本桜をふるう。

白哉が目覚めたのは、平原だった。

そこで目を覚まし、日番谷の霊圧がする大きな屋敷の方へ歩き始めたところ——

——ミツケタ、又シさまの『探し物』。

と、追いかけられているわけである。

「――散れ」

千本桜、と呟くのも、何度目になるだろう。

（――きりがない）

瞬歩でいったん距離をとろうとしても、相手は大勢・・・

「……中……」

解、と言おうとしたところで、あの霊圧が大気を震わせた。

「――！――！」

（この……霊圧、は）

わたしの、皆の、人生を変えたものの――

「――！――！なん、で……」

風神は、目の前のことに呆然とする。

「――あ、風神！なんか、いけたみたいだぜ！」

――死覇装姿の、一護がいた。

「……じゃあ、」

私の声音に、一護が振り返る。

「……風……」

「――やっ！とっ！」

私は、抑えていた霊圧を上げた。

一護と風神の霊圧に耐えきれられず、部屋の床が崩れ落ちる。

「へ？って……うわああああああ~~~~~~~~！！！」

一護だけが、落ちていった。

一人、暗い穴を見つめる風神のもとに、誰かがやってきた。

「……にい、さん」

「――風神、行くぞ。もう、あいつに興味はない。…そうだな、姫様をからかいに行くか。」

そういったのは、風神の兄。

「――はい、月神つきみにいさん。」

歩き出す兄を追って、穴に落ちた一護を振り返ることなく、風神は歩き出した。

似てる？（前書き）

続・現世――

似てる？

現世・空座町上空

午後8…30

「くうっ……………！！！！」

乱菊はとっさに、蛇尾丸の刀身を灰猫で反らす。

「……………！？榎天……………副隊長……………！！！？」

乱菊は、目を見開いた。

「よっ、乱。ア——、恋次今『殻繰』にかかっているから…油断しない方がいいよ？」

その通り、というように恋次が蛇尾丸を向けてくる。

「あーあ、僕の相手とっちゃってさあ。どーしてくれんの、爛槓？」
湊斗が恨めしそうに爛槓を見た。

「知らないわよ、そんなの……………あ、じゃあ尸魂界に行って遊んでくれば??？」

「いやあ、そっちは『黄昏』^{たそがれ}達が行っているから大丈夫じゃん？」

「てゆーか、あんた素でてるわよ。」

「いいじゃん、ちよつとくらい紳士ぶったって……………」

「よくない」

すっかり言い合いを始めた二人をしり目に、乱菊と恋次は刃を交えた。

「もーっ！ちよつと、がんばりなさいよっ！！」

文句を言う乱菊に、

（それができたら苦労はしねえよ……………）
と言い返す恋次であった。

「――破道の十一、綴雷電」
つづらいでん

バチバチっと、刃を電撃が駆け上る。

「――！！雲霧、『刀長柄短』、『刃折』！！」
とうちやうえたん はおれ

雲霧が刃を霧に変え、鬼道を回避する。

「『霧卷』、『渦』！」

氣艙の言葉で、霧状の雲霧が翠月を取り巻く。

「！風神、『陸風』！」

それを風で取り払い、氣艙の一撃を受け止める。

「そらっ！！！」

「くっ…はああ！！！」

キーン、と音がし、二人はとび退った。

「……なんか、ミニ朽木隊長の相手してる気になってきた……」
翠月はぼそつと呟く。

雲霧は、霧状のもの、刀、宙に浮かぶ刃の三つに分かれて攻撃してくる。

「……まあ、靈圧は大したことないんだけど。」

「…おい、聞こえてるぞ…」

氣艙が青筋を浮かべこっちを見ているのを見、げっと思わず言う。

「…げってなんだよ」

「…ねえ、あんたなんで私の相手したいって言った訳？」

とりあえず話題を変える。

「！…えーと、お前に興味があつた…から。」

・・・嘘、下手だな・・・

「…嘘つけ」

「……あー、もーわーったわーった！！わかりました！！」

「…逆切れかよ」あ、やば。隊長がいないせいで素が・・・

「……あんな、お前が、あの人と似てたからだよ。」
しばらくして、氣艙が言う。

「…『あの人』??でも、あの二人は…」
問うと、

「いや、二人は見てねえんだよ…オレは又シさまに連れられてちら
って見たんだ。」

「…で?それが何で私と戦うことに?」

聞くと「………」

「…いや、それだけ。」

「……は?」

「なんじゃそりゃ——!!」

「……思わず私は、絶叫した。」

私は、ふと『雨海』を見上げた。

「……え?誰かが『居る』?」

問うと、是、と返ってきた。

「…そんなあ…:よりもよって、今あ…:?はあ、じゃあ介抱して、
あとで『戻し』ておきましょ…:え?」

『雨海』が、笑った気がした。

「…ほ、ほんと?…じゃあ、顔見るくらいはいいよね…」

私は、『誰』かわかった途端、嬉しくなって琴を鳴らした。

似てる？（後書き）

尸魂界編は挿入でカバーします！

お知らせ..1

作者より…

えー、只今よりしばらくの間、、『雨の復讐』は休ませていただきます。

色々あるけど、やっぱり、別の連載を始めたからです。

いや、休むといっても、たまに投稿するかも??

まあ、やる気が出てきしだい、続きを書かせていただきます。

まあ、これを書き終えれば、外伝連載も書かせていただきます。

あんまり期待せず、気長に待ってください。

我がサイトに、書きかけ連載もあるので、ヒマつぶし程度に見ていってください！

まあ、たぶんオリキャラ・十番隊になると思います。

予定は、『雨の復讐』＜『みどり翠の月が語る記憶』＜死んで死神に…

という感じです。

『みどり翠の月が語る記憶』は、メモリー翠月視点でお送りします。

翠月が死神になってから、尸魂界篇、バウント編、新隊長天貝
繡助篇、破面篇、日番谷先遣隊奮闘記、虚圈救出篇、“メノスの森
” 篇、斬魄刀異聞篇、過去篇（軽くふれる程度）、空座決戦篇、
護廷十三隊侵軍篇（?）、死神代行消失篇を描く予定です。（あく
まで予定）

何か質問・感想等があれば、ぜひぜひお願いします！（なにぶん
新人なもので……）

t h a n k y o u a n d s o r r y :

〔陽間〕（前書き）

色々入れてまゝす。
更新遅れた：

〔陽間〕

その貴族、危険なり。

歴史を暴く、罪びとなり。

消せ。

この歴史から、今世界から。

根絶やしにせねば、世界は――――

尸魂界・一番隊隊舎

午後8；14

「――なに？〔陽間^{ひあん}〕の紋？」

そう、山本元柳斎重國は聞き返した。

《はい。おそらく…》

地獄蝶を通じて聞こえてくる、卯ノ花烈の声。
こころなしか、声が暗い。

それはそうだろう。

——何故なら——

《……どうなさる、おつもりですか。もしかしたら……》

「——一言うな。」

もしかしたら、なんて、ない。

「たとえ、そうだとしても。」

《ええ、わかっています。……ですが、——未来にも、このようなことを続けるのか、と……》

「——やつらは、敵。排除すべきものだ。」

『あの人……いや、あいつは、もう、————漚霊廷の、敵。』

自分の、声——

それを断ち切るように、地獄蝶を、放した。

現世・空座町上空——

「ツッ……!! はあ、はあ……」

氣艙の一撃に吹っ飛ばされ、一旦間合いをとる、翠月。

「ちっ……へっ、やっぱりお前、《こっち》側じゃねえか!! なんぞ死神の味方なんかしてんだ!？」

「意味わかんないわよ!! このねちねち野郎!! すっこんどけ!!」
「!?!? ね……ねちねちだと!?!? ううううう、うるせえ!! ほん
とだけど!!」

「じゃあすっこんでろ!! 私はイ忙しいの!!」

「それとこれとは関係ねえだろ!!」

どちらかというと、口数の方が多いが…

「で、《こっち側》で、どういうこと？」

「だからあ、お前は《天神》^{あまみ}様だろ?…たぶん…」

「ハア!?…誰ソレ。」

「……………まあ、それは別に…」

(…目を反らしつつ言ってるけど、そんなやばい人なの?)
まあいいか、と斬りかかろうとした時。

「ぎゃあ!!」

「のわっ!!」

「ぎゃあ!!」

上から、乱菊、翠月、氣艫。

「いったあ!おい、なんでこっちに飛ばしてくんだ!!」

「あははゝゝ、ごめゝゝん。」

「ま、松本副隊長!——げっ」

気絶している乱菊を抱え、とんできた方を見て、焦る。

「阿散井副隊長、ば…………バンカイハ、ナシッスヨ……」

狒狒王蛇尾丸が、首をもたげ、向かってくる。

まにあわ、ない。

(——せめて、副隊長は)

死が、迫る。

「散れ、『千本桜』」

視界いっぱい、桜が舞う——

「つてえ!!!おい、どういことだよ、風神…!?!」

穴に落ちた一護は、この異様な気配に気づく。

まるで、この、縦穴が、生きているような。

真っ暗。

穴の光のみ。

「――おい、なんなんだよ?修行、とかじゃねえよな?」

なんで、殺気石で、霊力が使えねえようにしてる?

「!!で、出られねえ…あそこと、穴だけだ…」

唯一、出られそうなのは、到底届かない高さの横穴。

「風神…何が、目的なんだ?」

尸魂界・黒稜門前

「ちっ…」

舌打ちする。

碎蜂は、二人相手に苦戦を強いられていた。

「――とろけろ、『ようもん熔問』」

「――とらえろ、『ひきなわ曳縄』」

香澄と真桐のコンビネーションは、まったく隙がなかった。

「くっ…!!!ぐああっ!!!」

『熔問』は名の通り、拷問向きの刀。

そうか、と言おうとしたら、急に辺りが真っ暗に：

：誰かに、とびつかれていた。

「お久しぶりですう！！！！ていうか、ちょっと見ない間に隊長になっちゃったなんて！！！！すごい！！！！私のこと、おぼえてます？？」

「わ、わかったから落ち着け！！顔くらい見せろ！！！！」
ぱっと自分から離れたやつを見た。

《あなた……死神、なの？》

一瞬のち――――

「――――う……み？」

言った途端満面の笑みを浮かべる、彼女。

「――――うん。うみ。雨海、だよ。：ホント、久しぶり。」

冬獅郎。と、雨海は言った。

「……やめようと。：言わないんだな、風神。」
静かに、兄が自分を見た。

「……もう、止められない……それに、他の貴族たちも、我慢の限界でしょう。」

「……そうだな、止められない、な……」

止められない。

……止められ、ない。

「……そろそろ、」 「」 だな。」

「……え？」

今、なんて？

「……終わったら、お前は」 「」 。

この戦いが、終わったら。

〔陽間〕（後書き）

長らく休載でした・・・

とりあえず、二章・突入！

似てる？ いや、似てる！！

「お願い。私を、殺して。」

真剣な表情で雨海が言った。

「……………は？」

日番谷は、いきなりのことに目を丸くした。

「そのために、私と、緋真さんと、雨：『雨海』様は、ずっと考えていたの。だから、『当主さま』の気が変わらないうちに…」

「いや、ちよつと待て。…ちゃんと、説明しろ。わかったか。」

だが、雨海はそれを遮っていった。

「だめ。ここと、現世、尸魂界は時間軸が違うの。それを完全に把握してるのは『当主さま』だけ。こっちの方が時間がゆっくりなのよ。だから、戦況が変わらないうちに…」

「ちよ、ちよつと待て！ 今尸魂界で何が…」

今度は、日番谷が遮る。

「……………とにかく、後は緋真さんが説明してくれるから！！ <異の者> 以外にしか殺せないんだから…ッ！ 隠れてッ！」

不意に、雨海は人がくる気配を感じ、巨大な桜の枝の合い間に日番谷を押し上げた。

「…雨海は、内心、（冬獅郎がいまだにちっちゃくてよかった…） と思ってしまった。」

現れたのは――

「……………！ れれ、爛槓に氣膾、湊斗まで？？ え、何かあったの？？」

雨海は軽く言った。

爛槓たちはああ、とため息をついた。

「……………どーもこーも、計画をパーにしちやいそうなやつがいて…」

「……そいつをとりあえずコロそーしたらさあ…」

「……思わぬ邪魔が入って…殺しそこね…」

「「こつてり孔燈さまにしばらくられたのでした!!!」」

・ ・ ・ いきびったり。

「……孔燈さま、こわいよねえ。ねー緋真さん、もてる女はつらいわあ〜」

「別にお前もてねーだろ!!!」

「なんですって!!!? ちょっと、喧嘩売ってんの!!!」

「おうおう売ってやるよ!!! たかいぜ!?!」

「……いいから、そいつって、だれ?」

呆れて雨海が言った途端、三人の顔が硬直した。

小さい頃から雨海の面倒を見たのは基本三人であり、よって三人の変化を一番間近で見た雨海が気付かないわけがなかった。

「……私のことね??? 身内関係?」

完全に固まった三人。

・ ・ ・ が、ハッと爛槓が叫んだ。

「…に、逃げるわよッ!!! 氣艚! 湊斗!!!」

「「はいいいっ!!!」」

雨海が本気で追求したら、あっさりバラしちゃうかも、と日ごろから思っている（または知っている）三人は一目散に逃げ出した。

「! あ、待てっ!!! ……はあ、いいよ、冬獅郎。」

がさがさつと冬獅郎が下りてくる。

「ふうう、とっさのことだから許してもらえるか分かんなかったけど…よかった。」

「?、とにかく、ちゃんと説明しろよ、雨海。なんで——」
言いかけた時。

後ろの巨木が、カツと蒼く輝いた。

桜が、蒼に染まる。

「――うわわわわっわゝゝゝ!!!!なに、一体何なのよお!!」

にぎやかな声とともに、桜の合間から。

「……………翠……………月……………? ? ? ? ? ?」

翠月が現れたのだ。

「日ッ……………日番谷隊長オオ!!なにとぞ御無事で……………ん? その二人は? 誰っすか……………って、えええ!!??」

突然、翠月が驚いて、日番谷の後ろをさしている。

「えっ、えええ!!?」

それは。

(……………あ、そういや、オレ初めて翠月と会った時……………)

日番谷は、思った。

「私のドッペルゲンガー!!???」

(……………雨海と間違えそうになったんだった。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8695u/>

雨の復讐

2011年9月20日22時33分発行